

メッセージ

アイルランド、ジャガイモ大飢饉が語りかけてくるものは？

徳永 哲*

昨年（平成16年）の夏、アイルランドの西部と西南部を旅し、ジャガイモ大飢饉に関する資料を集めて回りました。現在アイルランドはイギリスから完全に離れ、EUの一国となっていますが、国内どの都市へ行っても大変な活気にあふれていました。特にダブリンの市街地の変化には驚きました。街中にモール街ができ、駐輪場が整備され、路面電車が復活していました。西部地方へ行くにもハイウェイが整備されていました。

ダブリンを出るとコンネマーラ・バス・ツアーに参加しました。ゴールウェイ州の北西部にあたるこの地域は、景色のすばらしい所で、険しい岩山と湖沼がまるで人工の庭園のような美しさを見せてくれます。バスの窓から景色を見ていると次々と展開される大パノラマを見ているようでした。しかし、私は景色に魅せられながらも、同時に悲しい気持ちになりました。その美しい自然の中を約160年前、何千人もの飢えた貧しい農民が、食糧を求め、ほろを纏い、冬の冷たい風に晒されながらシェルターを求めてさ迷い歩いていたのです。飢饉で地代が払えなくなると、小作人は「追い立て」(Eviction)という過酷な仕打ちを地主によって受けていました。コテージを破壊され、追われた家族は、空腹と熱病に冒され、その自然の中をさ迷ったのです。そうした人々の目に、その美しい景色はどう映っていたのでしょうか？ きっと、絶望以外に何も存在しない不毛の、冷酷な大地と映ったに違いありません。

その後西部から南西部へと向かい、最後にコーク州、スキバレーンの歴史館を訪れました。このスキバレーンは最も早くジャガイモ飢饉の被害を受け、町や村の住民がいなくなり、当時廃墟と化した所です。本来豊かな農作地域であったのですが、私が行った時には、飢饉の被害にあったところとは思えないほど美しい放牧地が丘の斜面に延々と続いていました。この歴史館でかなりの資料を買い集めることができました。

ジャガイモ大飢饉とはジャガイモの病気、「胴枯病」によって、収穫前の芋の茎ばかりでなく、収穫後保管していた芋までが腐ってしまいました。約5年間で約100万人もの貧しいアイルランド農民が餓死あるいは熱病死しました。また、100万人以上の人々が祖国を捨ててイギリス、カナダ、アメリカへと新天地を求めて逃れて行きました。

実は「胴枯病」はアイルランドで発生したものではありませんでした。それはアメリカ大陸から大西洋を渡ってヨーロッパ大陸を襲い、ついでブリテン島へ渡り、最後にアイリッシュ海を越えたのです。ヨーロッパ大陸やブリテン島でほとんど死者は出なかったということです。しかし、アイルランドでは大変な惨事になってしまいました。

英国である大きな農園を経営している人が、ジャガイモが次々と腐っていくのを見て、その病気の見当をつけ、栽培の方針を穀物に切り替えたのだそうです。その人はフランスで同じ症状の病気を見たことがあって察しがつきました。彼はジャガイモ栽培に関する多くの情報と知識を得ていて、危機に対処できたのだと

*TOKUNAGA Satoshi : 日本赤十字九州国際看護大学 : 〒811-4157 福岡県宗像市アスティ 1-1 : (受理日 : 2005.12.4)

思います。この病気はジャガイモだけがかかる病気だったのです。彼はアイルランドにこの病気が渡ると大惨事になるのではないかと予感したそうです。その予感は当たりました。

アイルランドの農民は近代化とはまったく無縁の世界に暮らしていました。英国支配が続いて、アイルランド全人口の90パーセントを超えるカトリックは教育をほとんど受けることはできませんでした。識字率は低く、特に西部地方はゲール語が話され、英国からの情報は農民のもとへは届きませんでした。また、常食にしているジャガイモに対する知識もほとんどありませんでした。農民のほとんどが小作人で、街道筋の町から遠く離れた所に集落を形成し、孤立していました。彼らは古い習慣と風習に従って生きていたのです。

1845年秋、突然、ジャガイモが腐り、食べるものを失った貧しい農民たちはただうろたえるだけでした。聖職者が飢える農民の惨状を英国に訴えました。しかし、市場中心の自由経済体制を固持する英国は食糧を有料配給にしました。多くの農民は作物を地代に替えて納めていました。また、地主の農園で働いても労賃が現金ではなく、子豚や鶏といったもので支払われていました。そのため現金を蓄えておくことはできませんでした。したがって、農民は食糧が買えませんでした。

穀物類は病気の影響を受けなかったため、地主の農園には豊かに実っていました。その作物は農民の救済には向けられずに英国へ輸出されていました。しかも、農民たちは英国から逆輸入された食糧に高い利息を付けられ、「付け」で買わされていたのです。

また、飢餓に加えて、熱病が流行しました。天然痘、発疹チフス、回帰熱、赤痢、そしてコレラなど様々な疫病に冒されました。ジャガイモが食べられなくなったため、ビタミンCを摂取できなくなり、壊血病にかかって歯茎が崩れ、足が真っ黒に腫れ上がり、狂い死にした人も大勢いたということです。発疹チフスや回帰熱は飢餓熱として人々に恐れられていました。

1841年のアイルランドの病院および診療所の数は、ダブリン州は6,286人に対して1、ミース州で9,305人に対して1、ダウ州とロングフォード州で約2万人に対して1、メーヨー州で約36万人に対して1でした。その数字が示す通り、医療というものは、ほとんどアイルランド農民には無縁のものだったのです。熱病収容施設は飢餓熱が流行した1847年に各地にできましたが、数は少ないうえに巡回する医者が足りませんでした。その施設は不潔で、悪臭に塗れて、死を待つ人々の館と化していました。ボランティアで救済活動した医師や看護師、聖職者や良心的な政治家たちも大勢が病に感染し、死にました。アイルランドの悲惨な実態は英国に伝わってはいましたが、半信半疑だったようです。時間をかけて調査するのですが、調査員の多くは僻地のコテージに家族が折り重なって死んでいる惨状を目の当たりにするばかりでした。

閉ざされた世界、情報の無い世界、また医療や知識とは無縁の世界、こうした世界に入り込んだたった一つの、ジャガイモだけを腐らす菌「胴枯病」が前代未聞の歴史的な大惨事を引き起こしたのです。アイルランドは今EUの一国として発展していますが、また同時に、ジャガイモ大飢饉の惨事を忘れ去らないようにする努力が払われています。資料が編纂され、歴史記念館が各地につくられ、語り継がれています。今まで人が語りたくなかった時代のことを、新生アイルランドは再出発の原点にしようとしているようにも見受けられます。医療も福祉も教育も多分、このジャガイモ大飢饉の教訓が生かされていくと思います。

アイルランドのジャガイモ大飢饉は私たち日本人にも多くのことを教えてくれるようにも思えるのです。日本では医療、保健、福祉のあり方が大きく変わろうとしています。しかし、経済優先の政策が将来もたらずものは何か、それはアイルランドのジャガイモ大飢饉が教えてくれているように思います。